新しいコレクション

山下郁子《紬織着物 初雪の朝》

山下郁子（1954– ）
《紬織着物 初雪の朝》

2004年
絹、織
高さ170.7、幅130.0cm
平成31年度寄贈
撮影：エス・アンド・ティ フォト

紬織とは、軽くて丈夫な紬糸を使った絹織物のことで、素朴な風合いになることが特徴です。本作は、その紬織に絣柄でダイナミックかつ繊細な表現を試みました。絣柄とは、糸の束を防染のためところどころ紐などでくくり、染料液につけて染め、部分的に染まった糸を組み合わせて織り出される模様のことです。絣は、もともと藍の先染織物であるために、くくり箇所の両端より浸み込む「差込み」や、染めの段階において染料がくくり糸を通して糸を染める「かぶれ」ができます。織りの段階においても両端で模様を合わすよう調節しますが、このような表現が重なり「かすれ」ができます。この「かすれ」が「かすり」に転化したものが絣で、独特の風合いを持つ美しさが生まれます。

本作は、様々な絣の技法を用い、藍の濃淡によって全体を構成しています。見どころは、絣によって表された、くっきりとした斜めの線と柔らかな曲線のように思います。その斜めに走る風雪の勾配や柔らかな新雪の動きは様々で、単調に陥ることはなく、自然なリズムを刻みながら模様を繰り返します。また、縦に規則的に通る青い線で全体を引き締めながら、横織によって段替えがされた模様の組み合わせは、見るという目的に加えて、着用のイメージを可能にする意匠構成がされた着物のように感じます。

さて、今回モティーフとなっている「初雪」や「雪山の稜線」。城端（富山県南砺市）の山々に初めて雪がかかる風景がきれいで心に響いたことが本作をつくるきっかけとなりました。干し柿の産地である城端の柿の木の枝々に初雪が片側だけに積もっている様子や、何度か積もっては消える雪山の稜線を表現したといいます。

では、なぜ本作の模様に惹きつけられるのでしょうか。それは、説明を必要とせず、受け手側の想像を豊かにし、誰もが容易に作品に入り込み、作品に属することができるからではないでしょうか。見る者は、身近なものに置き換えて親しみを感じたり、何かを思い出したりして、感情を作品にのせるのです。山下は、生活の中での情景をモティーフに仕事をすることが多いようです。本作の他にも、雪が降った日の雪のにおいを表現したという《半紗織着物 寒香》や、海岸の玉砂利を打つ波の音を表現したという《半紗織着物 ヒスイ海岸》などがあります。どれも、城端の豊かな風土や自然を連想させます。

作品を、素材や技法がもたらす印象、模様から、それぞれに近くに感じられることで、ものとの距離が縮まり、もっと自由に感じて良いのだと教えてくれているようです。

（工芸課研究補佐員　島田里都子）